

要望演題 | 1-07 カテーテル治療

## 要望演題3

## カテーテル治療

座長:

大月 審一 (岡山大学病院)

小林 俊樹 (埼玉医科大学国際医療センター)

Thu. Jul 16, 2015 11:00 AM - 11:50 AM 第5会場 (1F アポロン A)

I-YB3-01~I-YB3-05

所属正式名称: 大月審一(岡山大学病院 小児循環器科)、小林俊樹(埼玉医科大学国際医療センター 小児心臓科)

## [I-YB03-05]心臓カテーテル検査・治療のヘパリン使用における定期的な活性凝固時間測定の有用性—第2報—

○菅 仁美, 伊藤 由依, 宮本 尚幸, 赤木 健太郎, 福山 緑, 本倉 浩嗣, 渡辺 健 (田附興風会医学研究所 北野病院)

Keywords: 活性凝固時間測定, ヘパリン投与量, 心臓カテーテル検査

【背景】昨年当学会で「低体重例・ハイリスク例では定期的な活性凝固時間 (ACT) 測定によるモニタリングが有用である」と発表した。この時ヘパリン投与量が議論され、当科の倍量で使用している施設が相当数あった。【目的】ヘパリン投与量を従来の倍量として同様の評価を行い、前回の結果と比較検討した。【方法】以前は「初回投与量を50U/kg、60分毎に追加投与を25U/kg (以下 A法)」としていたが、「初回投与量を100U/kg、60分毎に追加投与量を50U/kg (以下 B法)」に変更し、投与後5、30、60分の ACT値を測定した。目標到達 ACT値が右心カテ160秒、左心カテおよび治療は200秒以上を満たし、維持できていたかを後方視的に検討した。【結果】症例は、A法が体重2.6~30.7kg (中央値7.8kg、1例を除き12.0kg以下)、手術時間1.5~5.0hr (中央値2.6hr) の47例と、B法が体重7.0~13.0kg (中央値8.7kg)、手術時間1.5~4.0hr (中央値2.5hr) の11例であった。A法での ACT値は、投与5分後:205±43秒、30分後:190±42秒、60分後:189±33秒であり、B法での ACT値は、投与5分後:262±15秒、30分後:220±24秒、60分後:207±26秒であった。目標到達 ACT値に達していない早期追加例は、A法で2例(36.2%)、B法で1例(9.1%)であった。逆に ACT値が亢進しすぎた追加中止例は、A法で2例(4.3%)、B法で2例(18.2%)であった。【考察】A法と比較して、B法の ACT値は、ばらつきが少なく目標到達値に達することが多いが、逆に追加投与を中止した例は増えた。【結論】B法がより安全な抗凝固効果を有していると考えられる。ただし追加不要例は増加することから、A法と B法の間に至適なヘパリン量がある可能性が示唆された。